

「東日本大震災津波からの復興まちづくりフォーラム」

～ふるさとをいれて・三陸の創造を考える～

を開催しました！

県土整備企画室

平成 24 年6月9日（土）、盛岡市内のホテルにて「東日本大震災津波からの復興まちづくりフォーラム」を開催しました。

本フォーラムは、過去に前例のない規模とスピードで進む「復興まちづくり」について、県民と共に考え、今後役に立てるために県が主催したものです。定員200名に対して約250名の応募があり、多くの方々に来場していただきました。

第1部の講演では、はじめに、岩手県上野善晴副知事から「東日本大震災津波からの社会資本の復旧・復興について」と題して、岩手県の復興計画の概要と三陸復興道路整備事業などの現在の状況や、国営メモリアル公園整備事業に向けた国、県、市町村の取組み状況などについて説明がありました。

続いて、都市と自然の関わりにおけるランドスケープデザインを数多く手がけ、「景観十年、風景百年、風土千年」を提唱されている東京都市大学環境情報学部教授の涌井雅之氏から「後世に引き継ぐふるさとと三陸のまちづくり」と題して講演が行なわれました。

涌井氏は、東北の人々が度重なる自然災害を受けながらそれを克服し、自然と共生する仕組みを考え、その土地に暮らし続けてきたことを踏まえ、「減災」や「克災」の中にこそ三陸の将来があると強調されました。

また、豊かさを追い求める利益結合型社会から“深める”地縁結合型社会の形成を目指すべきだとしたうえで、「自然の力を押さえ込むのではなく『いなす』知恵を生かし、県土の再生につなげてほしい」と述べられました。

午後の討論会では、「三陸の50年、100年先を見据えた復興まちづくり」のテーマで、涌井氏のコーディネートのもと、8名のゲストに参加して頂き、「防災文化・教育の継承」「復興まちづくり」「震災の教訓を伝承するための施設」の3つの論題について、県内の大学生も交えた討論が行なわれました。

「防災文化・教育の継承」では、震災当日の避難の状況やそこから得られた教訓について、「復興まちづくり」では、水産業や建設業、行政からみた今後のまちづくりの現状と課題について、「震災の教訓を伝承するための施設」では、陸前高田市に誘致を要望している国営メモリアル公園への想いなどについてのお話がありました。

次ページ以降、討論会におけるゲストのご発言（要約）を中心に、当日の様子を振り返ります。



講演する涌井雅之氏



会場の様子

「防災文化・教育の継承」では、ゲストの方々から震災当日の避難の状況とそこから得られた教訓などについてお話がありました。



佐々木道雄氏（奥州市立梁川小学校校長）は、昨年度まで山田町立船越小学校に勤務されていました。発災から避難行動に移られるまでの間を次のように振り返られました。

「あの地震では、1分ほどで停電しました。校内放送が使えなくなったので、校庭への避難を手分けして行ないました。校庭に避難したのは午後3時少し前です。1年生が下校していたので、児童の

安否確認と誘導のために追いかけてきました。その後、校庭では、地震の後に児童を引き取りに来られた保護者の方に引き渡しました。資料にある136名というのは、残った児童の数です。

校庭から海は直接見えません。校舎に遮られているためです。私も校舎の端のほうから海を見ましたが、海の変化は見られませんでした。3時20分頃までその場所にいました。校務員さんが『**大したことがなくても、後で笑われてもいいから、とにかく避難したほうが良い**』と進言してくれて、それで避難を決断したわけです。それからの先生方、子どもたちの動きは早かったです。」

その後、群馬大学の片田先生の著書を引用されて、

「私たちは津波が来て20分くらいその場にいたと言いましたが、片田先生の言葉に『**逃げないという意思決定をしているのではなく、逃げるという最後の意思決定を出来ずに躊躇している**』とあります。私たちもそうです。逃げるという意思決定を遅らせていたのです。私たちは校務員さんが一言言ってくれたおかげで、みんなの意識が“逃げる”という意識に変わりましたが、大きなポイントだったと思います。」

防災文化・教育の継承

陸前高田市小友町で野球スポーツ少年団の監督をされている**及川修一氏**からは、教え子である中学生8人が津波の犠牲になられたことを踏まえたご意見がありました。

「佐々木先生がおっしゃったとおり、学校管理下にあった子どもたちは大方よかったのですが、あと20分地震が遅ければ、私は小学校のグラウンドでノックをしていたはずですが。そうすると、先生方のように的確な誘導ができたろうかと、今思うとゾッとします。

今思うのは、**放課後、児童を預かる施設もあるだろうし、塾などもそうだと思うのですが、そういったところでも常に危機管理をもってやっていかなくてはならない**と思っています。近く我々のスポーツ少年団でも避難訓練をしようかと思っています。」



討論会に出席して頂いた岩手県立大学3年の千田さん（陸前高田市出身）から、家庭で継承されてきた教訓について紹介がありました。

「おじいちゃんやおばあちゃんから『**地震がきたらここに逃げるんだよ**』と小さいときから言われて育ったので、私も今回の地震で逃げられたのかなと。学校での教育もそうですし、おじいちゃんやおばあちゃんと暮らしていたために、昔の話とか色々聞かせてもらって、今回自分が無事に逃げられたのだと、今回の震災を通して感じました。」

「復興まちづくり」では、震災前から進む人口減少、高齢化の問題を抱える中、さらに震災による被害を受けた現状を踏まえ、産業再生とまちづくりについて討論を行ないました。



津田保之氏は、釜石流通団地水産加工業協同組合理事長として、その再建に先頭を切って取り組まれています。

「漁業と水産加工業は、一方は海で魚を獲ることがなりわいで、一方はその魚を原料に加工品とすることがなりわいで、根本的な理念は一致していても、必ずしも利害が一致しない業界であります。しかし、今回の震災を通して、お互いの役割の重大さを再認識し

たところがありました。この業種の仲介に魚市場という存在があり、市場を中心に漁村なり、周辺の加工業が歴史的に栄えてきた経緯があります。

近年、消費者が求める安全安心の認識が大きく変わり、そこに対する設備の投資などがやや大掛かりになりつつあります。最近、特に高付加価値化が図られていくと共に、設備投資の額も非常に大きくなっており年々負担が大きくなっています。**市場を中心としたまちづくりを新たにすると共に、従来のように、海の間近に大型の設備投資をできるだろうかという非常に大きな懸案材料があり**まして、我々も答えを見出せないわけですけども、そういう側面をまちづくりの際にお考え頂ければと思います。」

復興まちづくり 1/3

南正明氏は、震災前から研究フィールドとしていた宮越田老地区に田老復興まちづくり研究室（通称：たろちゃん研究室）を開設し、三陸の復興につながる調査・研究を行なっています。



「震災以降、特に三陸の方に行かせてもらおうと、独自の文化が築かれていて、何をもって成り立ってきたかという海ですよね。海に近づいて、漁をして、船を作り、漁具を作り、番屋を建て、生活を一つずつ作ってきた文明みたいなものがあって、私は『三陸文明』と呼ばせてもらっています。その文明を我々は大切に思っていて、今そこに復興しようとしていると思うのですが、身の丈にあった漁業、養殖等を基軸とした水産業、これが今後も基幹産業として三陸を支えていくことは間違いないと思います。

そのときに**きっかけになってもらいたいのが、他地区から入りやすくしていく交通ネットワークであり、鉄道等を整えていくことが大事**だと思います。そして街の中、人口減少に対応してその街をどう成り立たせていくかということが今後の課題になると思いますが、その時の**キーワードは、やはり『核を作る』**。コンパクトシティーは、大きいものを小さくする印象ですが、核をしっかり作っていくことから始めると、そこに少しでも人が集まり、小さいお店でも集まってもらって、人が行き来する空間をできるだけ作る。そこが今後の復興を引っ張っていくと思います。

人口減少に関する考え方ですが、**人口減少を見通したような地域づくりというものは、どこを目標水準にするかということが曖昧になってしまいます**。被災したときの水準を念頭に置きながら、そこに戻すように出来るだけの努力をしていく、その中で減少するかもしれない。でも何が目標水準かという、やはりあった街というものをイメージし、目標にしていくことだと思います。」

若林治男県土整備部長からは、県の取組み状況と今後の対応について話がありました。

「なぜか今日は防災服を着てきました。ちょっと懸念することが起こり始めている、**1年3ヶ月が経過して、未だ非常時であるということが薄らぎはじめている**と思い、あえて防災服を着てきました。

今年には本格復興元年です。今年状況によって復興の進捗が決まる。とにかく急いでやらなければならないこと、若干遅くてもいいことを仕分ける必要があると思っています。ただ、我々が担当する安全の部分、防潮堤を含めて、暫定の応急の復旧しかしていません。安全が確保されている状況ではないので、徐々になるとは思いますが、ある一定程度の高さの安全は確保したい、それは早急にしたいと思っています。

あと、今は応急仮設住宅が13,984戸あるわけですが、恒久的な住宅を確保する必要があるの、災害公営住宅をなるべく早く建てようと思っています。測量、用地測量、設計、建設など通常の手段ではなく、設計から建設まで進めるという、**新たな非常時の対応を考えなければ**と思っています。ちょっと危惧することは、市町村さんのほうで高台移転等、住民の合意を取り付けるために、今が一番胸突き八丁のところだと思うので、一緒になって支援していきたいと思っています。

また、平成27年度くらいまでは財源とか見えているのですが、それ以降の財源が見えないので、そこが心配だなと思っています。復興交付金についても事業別採択です。何か発想を転換して、ここをいくらというのをドーンとやって、それから詳細をやっていくという形でなければ、なかなか総合的なプロデュースをするということに苦心する状況だと思います。」



復興まちづくり 2/3



向井田岳氏は、震災直後の道路啓開作業等の経験を踏まえながら、当時の状況と共に、建設業からみたまちづくりとして、コンパクトシティーの必要性を述べられました。

「建設業の立場でお話させていただきます。私も3月12日から現場に出ましたけど、自衛隊の方も警察の方も消防の方も役所の方も本当に必死に一生懸命頑張っていました。誰がどうというレベルでは

なく、やれる限りのことをやっていました。その中で、**大津波警報が解除にならない中、道路の啓開をしないと病人も運べない**ため、うちの社員も頑張ってもらいました。私は本当に誇りに思っています。あの時、あの時点で、もう一回津波が来ないなんて思っている人は誰もいませんでした。社員にも家族がある、強制はできないけれど、その中で彼らは何も言わずに次の日も出て一生懸命作業をした。これをぜひ分かって頂きたい。

それと復興の関係ですが、沿岸地区は人口が少なくなって、高齢化が進み、限界集落という問題が顕在化しています。これは間違いないです。それから目を背けては何もできません。**維持管理をやっている地元の建設業者としては、広範囲に除雪とか台風とか災害があったときに、広範囲にすべてを均等に素早くやるということ、今後ずっと求められたらキツイ**と思います。そういう意味では、地域の固有の文化をなくするという意味ではなくて、職・住が接近して、若者も高齢者も住みやすくするためのコンパクトシティー化というものは必要ではないかと思っています。」



県内で最も大きな被害となった陸前高田市長の**戸羽太氏**は、今後のまちづくりを、震災でご家族や友人を亡くされたご遺族の方々に配慮して進めていきたいとの想いを語られました。

「人口の話、高齢化の話とありますが、根本的には若い方々が地元に残れないという問題が如実に出ているわけですから、若い方々が地域に残れる環境をどう作っていくか、若い人にとっての魅力を

どのように追求していくかは大切なことだと思っています。ただ、陸前高田市なり岩手県の良さである田舎は田舎らしくというところは絶対大事にしなければならない。そのみんなのふるさとを守りながら、皆さんが勉強したことを活かせる職場というものを作っていかなければいけない。

8年間で陸前高田市の復興計画を作っていますが、正直申し上げまして、私は8年間で復興できるなんて思っていません。ただ、高齢化が進んでいる中で、今回の津波で80歳を越えた方が伴侶を亡くされているという方がいっぱいいらっしゃるって、その方々に15年計画なんて馬鹿な話ではできないわけで、やはり**一人ひとりが生きていて、一人ひとりが日本人で、一人ひとりが陸前高田市民であるということ**を念頭に置きながらやっていかなければならない。」

「もう一つ問題なのは、**今、230名の方が行方不明**です。その方々を探しておられる家族、友人、この方々をパーッと計算しただけで、2～3千人います。そういう方々を置き去りにできません。一方で復興、復興という何となく華やかなようなシグナルも大切ですが、人としての気持ちを置き去りにしないでやっていくということ、**人口が少ないわけですから、みんなの歩調を、ベクトルを合わせられるような統一感というものを大事にしていきたい**と思います。」

復興まちづくり 3/3



釜石市根浜海岸の旅館「宝来館」で女将をされている**岩崎昭子氏**からは、被災された方々と企業、行政を結ぶキーマンとして、学生の皆さんや若い世代への期待を熱く語られました。

「鶴住居の仮設の集会所で50代から80代のおばあさん方が、全国から色々な人に来ていただいて手仕事を教えてもらっています。ただ一つ問題があって、利益の出る活動を集会所でやってはい

けませんと言われたんです。小さなことですが、自分たちで立ち上がり、頑張っていることを色々聞いて頂いて、聞いている人が行動することによって、行政さんがどういうまちづくりをするかって興味が出てくるんですよ。ただ、上のほうだけで作っていると、自分たちとすごくかけ離れたまちづくりになってしまうので、一人ひとりが行動していく、そうすると行政さんも何を考えているか理解しようと思うわけですよ。

この二つのやり方が必要で、それを出来るのは実は学生さんたちなんですよ。時間をかけて一人ひとりの気持ちを把握するということは、実は皆さん、学生さん、特に国公立の皆さんだと思うんですよ。国づくりと一緒にやる人たちなんですよ、皆さんは。その自意識をもって、**私たちがふるさとに帰りたいのは死ぬために帰るんじゃない。若い人たちにこの自分のふるさとをつなげてあげたい！絶対あなたたちのルーツ、流れた血は岩手三陸の血だから、そのふるさとをあなたたちにあげるために私たちは帰る！**」

「震災を伝承するための施設」では、避難路の整備や小学生の歌、郷土芸能などの話題がありましたが、ここでは陸前高田市に誘致を目指す国営メモリアル公園について、ご紹介します。

全国太鼓フェスティバル実行委員会会長の**及川修一氏**から、太鼓を通じたメモリアル公園についてお話を頂きました。

「震災後、数ヶ月間は自衛隊やボランティアの方への感謝が身にしてみていましたので、その方々にありがとうを発信する使命があると思っていました。それで昨年8月7日のけんか七夕で、その囃子を聞いた時に、何も思わないのにただただ涙がでてくるんですね。



背中がざわざわするわけですし、『あ〜、俺の街はこれだな』と思ったんですよ。まさに小さい時から聞いたメロディですから、今は市外にいる若い方にも**このメロディを聞いて、太鼓を聞いて『俺が生まれた街はここだったんだ』って思ってもらいたい**と思っています。

そこで復興公園。太鼓の団体だけを見ても、1週間に10や20ではない団体が来て叩いてくれています。もし私の願いが叶うのであれば、**復興公園にステージのようなものができて、そういう人たちがいつでも来て叩けるような、一本松の脇で叩けるようなそんなものが出来たら**なあと思っています。そして、それが交流人口を生んで、様々な陸前高田を発展させる素になってくれたらと思っています。」

震災の教訓を伝承するための施設

戸羽太氏から、一本松に懸ける想いについてお話を頂きました。

「被災をしてから市民の方、市外の方、学者の先生方から色々な意見が寄せられています。『広島には原爆ドームがあって、一方で厳島神社があって、その二つがあることによってたくさんの方が訪れるんだよ。だから陸前高田市をそのまま残さない、屋上まで波を被った市役所をそのまま残しておきなさい。平泉が世界遺産に登録されたのだから、そこでセットでやれば世界中の人たちが来ますよ。』



ただ、**被災をしてから一番市民の皆さんの考え方で違うのが、ご家族を亡くされた方とそうでない方の考え方が全然違う**んですね。身内に不幸がなかった方は、自分の家が流されているわけですから立ち上がらなければならない。しかし、遺族の方はそこにその建物が残っていること自体我慢できないんです。全部が無くなってしまえば記憶が薄れていくことは当然であろうかと思えます。そこでこのメモリアル公園の大切さということになります。

一本松があります。一本松は既に枯死しています。ただ、今の技術であれば、あれをあの形のまま残すことは出来ます。**一本松には悲しみもありますが、希望もあるんですね。本当に奇跡の一本松、陸前高田市民にとってかけがえのない一本松、あの一本の松が残ったということで、気持ちを支えてもらったという市民はたくさんいる**わけです。一方で、市役所の旧庁舎をみれば、本当に涙しか出てこない。ですから、**私は一本松に託したい**と思っています。

国営防災メモリアル公園を作って頂いて、その中に一本松もしっかり保存していただいて、関係者や市民の皆さんとも相談しながら、**鎮魂の一方でみんなが明るくなれる、希望が持てる公園**をぜひ市民のためだけではなくて、県内あるいは今回の震災でお亡くなりになられた全ての想いも含めて、何とかこれを実現できないかと頑張っていますので、御理解いただければと思います。」

最後に、討論会の中で、出席して頂いた学生から、涌井雅之氏やゲストの方々への質問がありましたので、いくつかご紹介します。

○岩手大学工学部修士2年の松田さんから佐々木道雄氏への質問

松田さん「自分は秋田の内陸の出身で、小学生の時に火災の避難訓練などは適当にやっていた印象があります。津波の訓練とは違うと思いますが、**子どもたちにどのように危機感を持たせて訓練をやっていましたか。**」

佐々木氏「船越小学校では、春には必ず、登下校時に津波があった時を想定し、ここに逃げろという避難訓練をしています。しかし、今回はこの場所も津波にやられたので、なかなか難しいと思っています。危機感というお話がありましたが、群馬大学の片田先生が『危機感を煽るだけの教育では駄目だ。**これからの防災教育は、自然に対する怖れをきちんと持って、自分がそこからどうやって逃げるか、ここで安全だというところをさらに超えて、自分が主体的にやる**』ということを読み、怖いからというだけでは、子どもたちだけでなく、私たちも含めて難しいことだと感じているところです。」



○岩手県立大学2年の工藤さんから涌井雅之氏への質問

工藤さん「『復興』というもののゴールをどのようにお考えですか。」

涌井氏 「**復興にゴールはないと思うんですね。**日本が戦争に負けて1945年、戦争が終わったというまでかなりの時間がかかっている。何よりもまだ復興の最中だというのは沖縄だと思うんですよ。沖縄のことを考えるといまだに戦後復興が終わっていない。それは様々な違いがあって、一言ではなかなか言えない。

ただし、一つだけ言えるのは、内圧的な力で、自分たちでもう一度仕切り直してやっていこうという機運が常態化したときは、これは復興になるという可能性はあるんですね。**良い意味での忘却が生まれてきて、創造が生まれてきたときには、たぶんそれは復興が終わったことだと思わざるをえないですね。**」



フォーラムを終えて

本フォーラムは、今後の復興まちづくりについて、県民とともに考え、今後に生かすために開催しました。出席者に記入して頂いたアンケート結果（回答数97）では、**9割の方に「非常によい機会となった」「よい機会となった」と回答**していただいています。

自由意見では、「**単なる復興ではなく、将来の方向性も議論ができた。**」「**もっと多くの県民、国民に今日の話聞いて欲しかった。**」「**子どもたちのこと、岩手のこと、世界の中の日本を考える良いきっかけになった。**」というようなご意見を頂きました。

今後も、ふるさと岩手・三陸の創造に向けて、県民と共に考える場を大切にしたいと思います。